

教員の同僚性を高める協働的な取組の在り方

— 道徳教育における若手教員への支援を通して —

長期研修生 濱本 沙和佳

1 研究の目的

学校が抱える問題は複雑化・多様化しており、組織で対応する必要性が高まっている。また、教職員の組織における年齢や経験年数の不均衡化にも直面しており、教員の多くは、経験年数等にかかわらず、様々な校務分掌を抱え、多忙感を感じている。諸課題を組織で対応する雰囲気醸成や個々の多忙感の軽減を図るためには、教員間の支援やつながりを充実させ、同僚性を向上させる手立てを意図的に仕組む必要があると考える。特に、新規採用教員が増加傾向にある今、若手教員への組織的なサポートは、どの職場においても求められていると考える。

そこで、全ての教員が関わり肯定的な人間関係やつながりを目指す道徳教育に着目した。道徳科の授業経験の浅い若手教員が所属する学年部を対象に、道徳教育における取組と組織において必要不可欠なコミュニケーションの活性化を目指した取組を通して、協働的な取組の在り方について研究を進めることとした。

2 研究の内容

(1) 道徳教育における取組

ア 道徳科の授業スタイルの確立

道徳科の授業の進め方について基本的な考え方を示した「道徳科の時間」授業スタイル（授業展開のポイント）を作成した。夏季休業中には研修講師を招へいし、道徳科の授業についての研修の機会を持ち、道徳科の意義や方針について共通理解を図った。

イ 授業構想シートによる学習ビジョンの共有

子どもの心に目を向けた「タマゴッチ理論」を用いた教材分析表と、学習の流れを示した学習指導案を合わせた授業構想シート①を作成した。授業構想シート②には板書計画を記載し、授業構想シート③には授業後の振り返りを記入して、反省点や改善策等を引き継げるようにした。

ウ 「リレー道徳」の実践

夏季休業中に、若手教員と「リレー道徳」の教材準備を進めた。「リレー道徳」は、9週にわたって実施し、教材を引き継ぐ順番を工夫し、先輩教員から若手教員が学ぶことができる流れとした。指導内容をよりよいものに改善していくことで、教員個々の指導力向上を図った。道徳教育推進教師に、「リレー道徳」実施後の打合せでのアドバイスを依頼し、スクール・サポート・スタッフに、板書の撮影や写真の印刷、ファイルの整理などの協力を仰いだ。

エ 「小さな道徳」の実践

道徳教育推進教師が中心となり、道徳部会で「小さな道徳」の資料や指導の流れを作成し、そのデータを共有することで、どの教員も容易に扱えるようにした。朝の会や終わりの会の5分間を使って、学級担任以外の教員が学級指導に加わり、若手教員をサポートした。

(2) コミュニケーションの活性化を目指した取組

ア 日常的な対話の積み重ね

教職員の思いや考えを共有する場面をより多く設けるために、学年部や学年部外の教職員への声掛けを意図的に行った。道徳教育推進教師と連携し、自分自身も教員同士、学年部同士の「つなぎ役」としての役割を意識しながら、日常的な対話の積み重ねを大切にしたい。

イ 教職員向け通信の発行

若手教員や学年部の取組の様子、研究の実際について、定期的に教職員向けの通信を発行し、全体への周知を図った。研究への協力を仰ぐとともに、互いの頑張りを認め合う一つの情報共有のツールになることを目的として実施した。

3 研究のまとめ

道徳教育やコミュニケーションの活性化を目指した取組から、同僚性を高めるには、若手教員を始め学年部が課題だと感じている教育実践を理解し、「ビジョンの共有」「情報交換の場の設定」「教員同士が積極的に関わろうとする姿勢」を意識しながら、その課題解決のために組織的に取り組むことが重要であると考えられる。そして、同僚性の向上には、日常的な対話の積み重ねが必要不可欠であり、教員一人一人が各々の立場で、教員同士、学年部同士などの「つなぎ役」になり得る存在であることを自覚し、互いに関わり合おうとすることが大切であると考えられる。

学校という組織の中で、教員のよりよい協働が子どもたちの成長に良い影響をもたらすことを意識し、自分自身も「つなぎ役」としての役割を自覚しながら、同僚性を高められるよう尽力していきたい。